

ジャパンカップ出走予定外国馬プロフィール

◆ギニョール(GUIGNOL) = ドイツ

牡 5 歳・黒鹿毛(ドイツ産・2012 年 5 月 8 日生まれ)

父:Cape Cross = 母:Guadalupe(母の父:Monsoon)

馬主 : シュタル・ウルマン

調教師 : J. カルヴァロ

騎手 : F. ミナリク

戦績 : 通算 14 戦 6 勝、3 着 3 回

総獲得賞金: 約 5,420 万円

主な戦績: '17&'16 バイエルン大賞(独 G1)	1 着
'17 バーデン大賞(独 G1)	1 着
'17 バーデン経済大賞(独 G2)	1 着
'16 ベルリン大賞(独 G1)	3 着

ギニョールはドイツで生産され、父が現役時に英 G1 ロッキンジステークスなどマイル重賞を 3 勝し、種牡馬として英 G1 英ダービーや仏 G1 凱旋門賞など優勝のシーザスターズや、米 G1 ブリーダーズカップフィリー&メアターフなどを制したウイジャボードを送り出したケープクロス。母は 2002 年伊 G1 イタリアオークス優勝馬グアダルルーペ。その父モンズンはドイツを代表する名種牡馬で、産駒のスタセリタは現役時に 2009 年仏オークスなど G1 を 6 勝し、阪神ジュベナイルフィリーズやオークス優勝馬のソウルスターリングの母として知られています。また、ギニョールの 4 代母グリーンウェイは日本に輸入されたターゴワイスの娘で、フランスで G3 アランベール賞と G3 プティクヴェール賞を勝っています。

ギニョールはこれまで 14 戦 6 勝。キャリアのうち 3 戦はフランス、1 戦はイタリアでのもので、遠征競馬での勝ち鞍はありませんが、今年 5 月 1 日の仏 G1 ガネー賞(サンクルー競馬場、芝 2,100m)では後に凱旋門賞で 2 着のクロスオブスターズから 4 馬身半差の 6 着になっています。

2 歳時は心身共に幼かったことでデビューが見送られ、3 歳になった 2015 年 4 月にケルン競馬場、芝 2,200m のテュフラインランド賞にミナリク騎手で出走。この 2 カ月半後にドイツダービー馬となるヌタンにクビ差をつけて優勝し、初陣を飾りました。良馬場の勝ちタイムは 2 分 17 秒 8 です。その後、5 月にフランスに遠征してロンシャンの準重賞ラーヴル賞(芝 2,400m)に出走しましたが、勝ったサラズンから 4 馬身 3/4 差の 5 着に終わり、この年は 2 戦ただけでした。

4 歳になった昨年は 7 戦して 2 勝、3 着 3 回。3 月にクレフェルト競馬場のヴァインゲーテスシュロスヨハニスベルクラインガウ賞(芝 2,050m)に出走して 2 着馬に 8 馬身半差をつけて優勝。初めての重馬場で 2 勝目を挙げました。勝ちタイムは 2 分 13 秒 3。次いで 4 月の準重賞ダールヴィッツ賞(ホッペガルテン、芝 2,000m)は 2 馬身半差の 3 着、2 度目のフランス遠征となった 6 月の仏 G2 シャンティイ大賞(シャンティイ、芝 2,400m)はブドー騎手との初コンビで先行して粘り込み、ワンフットイン

ヘヴンから2馬身半差の4着で入線。8頭立ての最低人気でしたが、悪くない結果を残しました。

ドイツに戻ったギニョールは7月の独G2ハンザ大賞(ハンブルク、芝2,400m)に再びミナリク騎手とコンビを組んで3番人気で出走。不良馬場で先行して見せ場を作り、2014年メルボルンカップの勝ち馬で断然の1番人気に推されたプロテクショニストから7馬身1/4差の3着でレースを終えました。2着は昨年のジャパンカップ7着馬のイキートスで、その差は4馬身でした。G1初挑戦となった8月のベルリン大賞(ホッペガルテン、芝2,400m)は、2番手からまたもプロテクショニストに差されて3馬身3/4差の3着に敗退。2着は一昨年、昨年と2年連続してジャパンカップに参戦したナイトフラワーでした。その後、約2カ月の間隔を空けて臨んだイタリアのG1ジョッキークラブ大賞(サンシーロ、芝2,400m)は、重馬場で先行したものの勝ったベンチュラストームに大差の6着に終わりました。しかし、国外での大敗が次の独G1バイエルン大賞(ミュンヘン、芝2,400m)で波乱を巻き起こす伏線となりました。

ヨーロッパシーズンの終盤に位置するバイエルン大賞は9頭立て。ここにはイギリスからレーシングヒストリー、ホークビル、アルゴメーターの3頭が参戦。1番人気はドイツダービーで2着に入り、2走前の仏G2ドーヴィル大賞を制したサヴォワヴィーヴル、次いで英G1エクリプスステークス優勝馬ホークビル、前走重賞勝ちの上がり馬アルゴメーターが続きました。ミナリク騎手がシールゲン厩舎のロイヤルソリティア(7着)に配されたため、イタリア人騎手のカデドゥに乗り替わりました。前走の大敗でしんがり人気となったギニョールは、この時が初めての左回りの競馬でした。ゆっくりと先頭に立つと淡々としたペースを刻み、向正面の終わりあたりから徐々に後続馬群との差を開き、直線に向いても7、8馬身差のセーフティーリード。他の騎手が楽に逃がし過ぎたと気づいた時にはすでに遅く、レーシングヒストリーに1馬身3/4差をつけて優勝。重馬場の勝ちタイムは2分37秒4。イキートスは4馬身以上離された4着でした。これをきっかけにギニョールの眠っていた能力が開花します。

年が明けて5歳を迎えたギニョールはガネー賞から始動してここまで5戦して3勝。シュミノール騎手に手綱を委ねたガネー賞は前述の通り6着でしたが、中3週で臨んだ5月28日の独G2バーデン経済大賞(バーデンバーデン、芝2,200m)は3戦ぶりに鞍上に戻ったミナリク騎手のコントロールで逃げ切り勝ち。ここは6頭立ての5番人気とバイエルン大賞の勝利がフロック視されていましたが、イキートスをクビ差の2着に退けました。勝ちタイムは2分15秒6。

前年は不良馬場で3着だった7月1日のハンザ大賞。今年は重馬場となり、2番人気ながら実力発揮ならずブービー4着でした。勝ったのは3番人気のチンギスシークレットで、1番人気に推されたイキートスが3馬身3/4差の2着でした。しかし、今シーズン4戦目となった9月3日、独G1のバーデン大賞(バーデンバーデン、芝2,400m)はギニョールが逃げ馬として完成に近づいたレースと言えるかもしれません。3番人気のここは弾けるようにゲートを出ると内ラチぴったりを通過して後続の追撃を完封。1番人気のイキートスに2馬身半差をつける完勝でした。良馬場の勝ちタイムは2分32秒5。ジャパンカップのボーナス受給資格を得たことによって陣営からは日本行きを視野に入れた発言が聞かれるようになりました。

そして、11月1日、ギニョールにとって出世レースとなったバイエルン大賞を迎えます。馬場は昨年と同じ重馬場。1番人気は凱旋門賞6着のチンギスシークレットと、G1フランスダービーでブラムトの短アタマ差2着したヴァルトガイストが肩を並べ、ギニョール、イキートスが続きました。レースは前走同様好スタートを切ったギニョールが逃げ切り勝ち。イキートスが差を詰めてクビ差の2着、チンギ

スシークレットがさらにクビ差の3着。もう一頭の人気馬ヴァルトガイストは4着でした。重馬場の勝ち時計は2分37秒8。ギニョールは、3度のG1勝ちを含め、左回りで5戦4勝。脚質が対照的なイキートスとは7回対戦して5度先着と勝ち越しています。



2017年バーデン大賞
(c) Kennosuke Sasaki

ジャパンカップ出走予定外国馬関係者プロフィール

■ ギニョール (GUIGNOL)

● 馬主：シュタル・ウルマン (Stall Ullmann)

1869年に銀行家であったエドゥアルト・フォン・オッペンハイム卿が設立した、ドイツで最も古い牧場であるシュレンダーハン牧場のオーナーを務めるゲオルク・フォン・ウルマン男爵の夫人が代表を務める法人名義。

ケルン近郊のベルクハイムに位置するシュレンダーハン牧場は、馬主および生産者部門のリーディングに30回以上輝いており、シュタル・ウルマン名義を含め、独ダービーは1908年を皮切りにこれまで18勝、独オークスは15勝、バーデン大賞を11勝、バイエルン大賞を8勝など、ドイツ競馬を代表する存在としてG1勝ち鞍を量産している。これまでのシュレンダーハン牧場名義の代表馬に、1927年からバーデン大賞を3連覇し、ドイツ史上最強馬の評価もあるオレアンダー、1940年の独ダービーおよび独オークスを制し、牝系として後にマンハッタンカフェやブエナビスタなど数多くの名馬に連なるシュワルツゴールドなど歴史的な名馬がいるほか、近年ではイトウやベルリン大賞など独G1・2勝のアイヴァンホウ(その後オーストラリアに移籍してアワーアイヴァンホウに改名)に加え、2007年の独ダービーおよび2008年のドイツ賞(現ベルリン大賞)優勝のアドラーフルーク、2009年の独ダービーやラインラントポカル優勝のウィンナワルツがいる。また、ウルマン男爵名義の所有馬には、1998・99年のバーデン大賞を制したタイガーヒルをはじめ、1993・94年のオイロパ賞を連覇し、種牡馬としても成功を収めたモンズン、2005年のブリーダーズカップターフを制したシロッコなどがある。

1999年のジャパンカップに、ウルマン男爵名義のタイガーヒルが参戦して10着。シュレンダーハン牧場名義では、2014年のアイヴァンホウが6着、2015年のイトウが18着。

● 調教師：ジャンピエール・カルヴァロ (Jean-Pierre Carvalho)

1971年8月11日生まれ、フランス出身。1985年からJ. ベルトラン・ド・バラダ厩舎で見習騎手を務め、1992年にオーストリア・ウィーンへ拠点を移す。G. マーティン調教師のもと、オーストリアではおよそ40勝を挙げたほか、ハンガリーダービーも制している。1994年にドイツへ移籍すると、1999年頃から同国のトップ調教師であるM. ホファー師の管理馬に騎乗するようになり、2003年にフィーペスシャフルで独G3ベルリン大賞、2008年にフェアブリーズで独G2コリーダ賞を制するなどしている。2002年からは毎年トップ10入りし、リーディング最高位は2003・04年の2位。

騎手として800勝以上を積み上げた後、2009年に調教師免許を取得。シュトゥットガルト近郊のイフェッツハイムに厩舎を構え、同年6月28日にミュンヘンで初勝利を挙げる。ドイツで21戦6勝の成績を残した一方、フランスでは20戦1勝。2010年はサラナで独G3フェリエンラントチロルを制し、重賞初勝利を挙げるなどドイツで58戦8勝、フランスで60戦4勝。フランクフルトに拠点を移した2011年は53戦5勝、フランスでは48戦4勝。翌年からはフランスを拠点とし、同年125戦10勝、

2013年 171戦 24勝の成績を残した。

シュレンダーハン牧場の専属調教師として2014年にドイツに戻り、同年は123戦 25勝でリーディング12位、2015年は122戦 24勝で10位、昨年は98戦 25勝で12位。主な管理馬に2014年のバーデン大賞とバイエルン大賞を制し、ジャパンカップ 6着のアイヴァンホウ、2015年のダルマイヤー大賞優勝馬ジュリアーニ、同年のバイエルン大賞を勝ってジャパンカップ 18着のイトウがいる。

今年11月16日現在、ギニョールの重賞3勝、パレスプリンスの同2勝を含む117戦 26勝で7位。

● 騎手：フィリップ・ミナリク (Filip Minarik)

1975年3月10日生まれ、旧チェコスロバキア社会主義共和国・プラハ出身。父は同国のチャンピオン騎手として活躍。高校に通いながらアマチュア騎手としてキャリアを始め、1991年にプラハで初勝利を挙げる。1996年に父の知り合いであった M. レルケ調教師を頼ってドイツへ拠点を移す。同年から2年はともに9勝に留まったが、1998年に31勝、翌年に26勝と勝ち星を伸ばす。

P. シールゲン厩舎の管理馬に騎乗するようになると、2000年には独 G3 スプリント大賞を含む100勝を挙げてリーディング5位に躍進した。2005年にキャリアハイとなる110勝を挙げて、初のリーディングタイトルを獲得。以降は怪我の影響で19位に留まった2007年と2013年(8位)を除き、毎年トップ3を維持し、2011年に81勝、そして昨年は66勝でこれまでリーディングに3回輝いている。

これまでの主な獲得タイトルに2004年伊 G1 グランクリテリウム(ケーニヒスティーゲル)、2005年独 G1 ドイツ賞およびオイロパ賞(ゴンバルダ)を始め、独 G1 バーデン大賞は2006年(プリンスフローリ)、2010年(ナイトマジック)、2014年(アイヴァンホウ)、そして今年(ギニョール)と4勝、独 G1 バイエルン大賞は2012年(テミダ)、2014年(アイヴァンホウ)、2015年(イトウ)と3勝しているほか、サラミナで2012年独オークス、ジュリアーニで2015年ダルマイヤー大賞を制している。

今年11月16日現在、ギニョールの重賞3勝、パレスプリンスの同2勝を含む524戦 65勝でトップに立っている。これまで日本ではジャパンカップに2回騎乗し、2014年アイヴァンホウで6着、2015年イトウで18着。